

## ベトナムFW 8/2~8/4 平和班報告

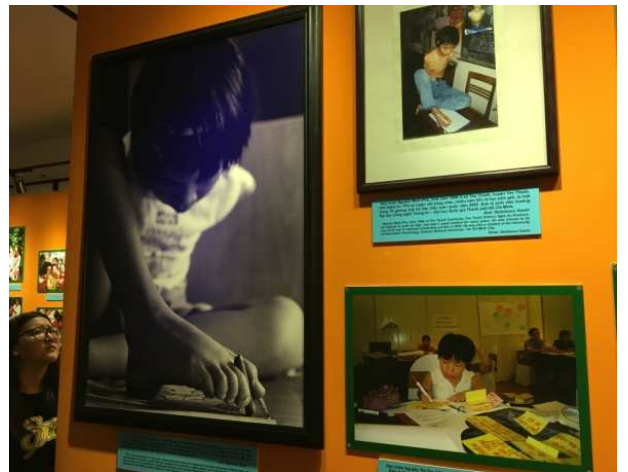
国際科の平和班4名（飯本、大津、奥洞、田村）は、8月2日から4日までの3日間、ベトナムのホーチミンにおいてフィールドワークを行ってきました。

### 1日目（戦争証跡博物館・平和村・ドク氏との夕食会）

ここではベトナム戦争に関する写真や、実際に使われた戦闘機、兵器、処刑場などが展示されていました。教科書等で見たことのある写真も数多く展示されていて、今まで自分が見てきたものが、現実にも起こったことなのだと改めて感じました。館内を見渡すと、アジア系の人だけでなくヨーロッパやアメリカ系の人達も訪れていて、世界各国から来た人々が過去について知る場所があるのは素晴らしいことだと思いました。展示されていたものの中で最も印象に残っているのは、両腕を失い、足で絵を描いたり、勉強をしたりする子どもたちの写真です。自分よりも小さな子どもが足を使って懸命に勉強している姿に心を打たれました。その子どもはきっとその後も人生の色々なところで苦しい思いをしたのではないかと思います。また、井戸に隠れていた3人の子どもがアメリカ兵に見つかり、殺害されてしまった話にも、心が痛みました。彼らは政治的に有力な人物の子孫であったがために、罪はないけれども、殺害されました。他にも多数のベトナム戦争に関する展示がされていて、戦争の恐ろしさを改めて感じるとともに、自分が生活している環境がどれほど平和で、尊いものなのかを痛感しました。また、今回見学したようなところは、聞くだけではなく、実際に足を運んで、自分の目で見るのが大切である、ということも心の底から感じました。

午後は、平和村を訪問しました。平和村とは、枯葉剤の影響による障がいを持つ子どもたちが暮らす施設です。生後16カ月から37歳までの方が暮らしています。平和村ではそのような子どもたちを育てるだけでなく、自立のための支援も行っているそうです。子どもたちと交流してみて、自分が想像していたよりも障がいが重く、驚きを隠せませんでした。平和村の先生は、枯葉剤の影響はいつまで続くかわからないとおっしゃっていて、戦争はまだ終わってないのだということを痛感させられました。

夜は、グエン・ドク氏との意見交換会、夕食会でした。ドク氏は46回もの来日経験があり、平和のための様々な活動を行われています。ドク氏は体調がすぐれない中、私たちに貴重なお話をしてくださいました。その中でも特に、「健康が一番大切である」ということと「枯葉剤による障がいを抱える人への精神的支援の重要性」を強く訴えられていました。私たちの質問にも1つひとつ丁寧に答えて下さり、ドク氏の日本に対する思いも知ることができました。



## 2日目（現地大学生との意見交換会・クチトンネル）

午前中に現地大学生のタオさんとの意見交換会を行いました。タオさんはホーチミン市内の大学に通っている女子大生で、もともと日本のアニメや漫画が好きで日本に関心を持ち、現在は日本の文化を勉強しているそうです。タオさんとの意見交換会は通訳の方に手伝って頂きながら英語で行い、改めて自分の英語力の乏しさを痛感しました。タオさんはベトナム語、英語を話せるとともに日本語も勉強中で、彼女のように3カ国語、もしくはそれ以上の言語を話す若者が自分たちと同じように社会に出た時に、自分が『日本語と（乏しい）英語“しか”話せない』状況になりそうで、グローバル化していくこの先の社会における言語力の必要性を感じました。宗教観について、「他教徒に対してどのような偏見があるか」と尋ねたところ「なぜ他教徒に対して偏見を持つのか分からない」との答えを頂きました。日本ではあまり宗教に馴染みがない人が大多数だが、ベトナムでは様々な宗教が入り乱れているのが当たり前で、そして当たり前のように他教徒と共に生活していくのが当たり前だということだそうです。レストランの料理等も、宗教上食べることができないものが含まれていれば、コックに言ってその場で対応してもらえるそうです。

午後にはクチトンネルの見学を行いました。クチトンネルとは、ベトナム戦争中に村の人々が25年間も隠れて暮らし、ゲリラ戦に備えたトンネルです。このトンネルは、一見何の変哲もない雑木林の地下に掘られており、全長はなんと250kmにも及びます。地下3層構造で蟻の巣のように小さな部屋がいくつもあり、ゲリラ戦の軍事会議や傷ついた兵士を治療する医務室、武器や弾薬を手作りする部屋や、軍服などを作る部屋はもちろんのこと、子どもたちのための学校や劇場など娯楽施設もあったということです。10mほど観光客用に解放されており実際にもぐってみましたが、とても狭く、しゃがんだまま歩いてもかなりきつかったです。これは当時の完全武装した米兵が侵入してきても入れないだろうと思うとともに、この狭い地下だけで25年間も暮らした村人たちに驚きました。地上は枯葉剤が散布されたり米兵の銃撃が続いたり危険な状態だったので、地下で料理をする際に発生する湯気などは居場所がばれないように遠くから地上に出るように工夫されていたり、昼間は銃撃戦を行い夜は農作に勤しんだり、米軍の不発弾を自分達用に改良したりなど、村人全員で徹底抗戦する様子が分かりました。実際に使われていた落とし穴は毒が塗られた針が敷き詰められていたり、道端のクレーターのようになっている所は米軍の爆弾が落とされた場所だったり、実際にこの場所で戦争が行われていたことを強く実感しました。



## 3日目（現地日本語学校訪問）

現地の日本語学校で、日本語を勉強中の学生と日本語で交流をしました。学生の多くは農村の出身で、なぜ日本語を勉強しようと思ったのかと尋ねると、「日本で働きたいからだ」と答えていただきました。もっと日本語を上達させたいと必死に質問してくださり、私たちも積極性を持たなければいけないと思いました。

この研修で、私たちはたくさん貴重な体験をさせていただきました。ベトナムで学んだ多くのことを今後の研究に活かしていきたいです。

